勇敢な社員

勇敢な社員

源氏鶏太

勇敢な社員

《検印廃止》

昭和四十一年二月二十日　印刷
昭和四十一年二月二十五日　発行

定価　二百七十円

著作者　源氏鶏太
発行者　矢貴東司
印刷者　堀内文治郎

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蠣殻町一ノ一二
電話（六六六）四〇〇一、二
振替口座　東京　六四三五一

落丁・乱丁の節はお取替え致します　1966 ©

目　次

勇敢な社員……5
横丁産業の人々……17
模範社員……31
滅私奉公……44
東京よいとこ……55
美談の果て……75
人生のお荷物……88
お地蔵さんのある町……106
口紅と泥棒……122
娘の旅行……135
娘とボロ靴……148
雪子の結婚……165
お妾さん……180
素敵な元気……194
晩　愁……207
麗しきオールド・ミス……223

装幀・鍋井克之

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

勇敢な社員

勇敢な社員

一

総務課の成田君は、勇敢なるサラリーマンであった。すくなくとも、会社内ではそんな風に呼ばれていた。そして、このいい方の中には、五分の皮肉と五分の親愛感がこめられているようであった。本来なら、九分の皮肉がこめられてありそうなものであるが、それを五分で食いとどめているのは、成田君の人徳のしからしむるところであったかもわからない。

しかし、実際問題として、成田君が果して本当に勇敢なるサラリーマンであるかどうかは、まだ誰も実証のチャンスに恵まれていないのである。成田君は柔道が三段、剣道が二段、合計五段の持主であった。だから、喧嘩でもさしてみたら、滅法に強い筈なのである。しかし、単に喧嘩が強いだけでは、勇敢とはいえない。成田君が勇敢なるサラリーマンといわれるについては、次の来歴がある。

三年前、成田君はこの会社の採用試験に応募した。十人採用の触れ込みであったが、採用試験を受けに来た学生の数は、二〇〇名を僅かに超過していた。成田君の学校の成績が抜群という訳でもなかったし、この受験者の大群を見ただけで、これではダメに違いない、と大きな溜息をついた。しかし、何んべんも溜息をついているうちに、何んとでもして入社したいような猛然たる気持になってきたのである。

成田君の面接の時となった。成田君は数人の重役の前に、極度の緊張感を漂わせながら腰をかけた。そのとき、一人のバカな重役がいて、成田君に質問したのである。

「ほう。柔道が三段で剣道が二段とは、まったく凄い。では、君に訊くが、もし、この会社にギャングが躍り込んで来て、われわれ重役の貴重な生命が風前の灯の危機に曝されたら、君はどうするかね。」

成田君は念の為に訊き返した。

「それは私が、この会社に社員として採用された後のことでありますか？」

「勿論である。」

「それなら私は、忽ち身を挺してギャングに躍りかか

っていき、投げる、打つ、の死力をつくして重役の皆さんの貴重なる生命をお救い致します。」
「ほんとうかね。」
「はい。何故なら、それがサラリーマンたる者の義務だ、と固く信じているからであります。」
バカな重役は、会心の笑みを洩らした。
成田君は採用された。十人採用の筈が十一人になったのは、そのせいである。例の重役が、
「ひょっとしたら、あの男は、ほんとうに身を挺して、われわれの急を救ってくれるかもしれない。あんなのを一人ぐらい採用しておくのは悪くない。何んとなく安心である。」
と、頑固に主張したからであった。
この話が人事課の男から社内に洩れたのである。誰も彼も、そんなことを訊く奴も訊く奴だが、ぬけぬけとてれもせずに答える奴も相当なもんである、と噂しあった。こんど入社してくる中に、とても勇敢なるサラリーマンがいるそうだ、ということになった。みんなでせせら笑っていたのである。今頃、一身を犠牲にしてたかが重役の生命を救うなんて、サラリーマンとしては阿呆らしき限りだ、と信じられていた。
だから、成田君は入社第一日目から、待ってましたとばかりにみんなに散々冷やかされた。成田君は大いに赤面して、
「実は、この会社に入りたい一心からの失言であったのです。」
と、弁解につとめたのである。
「何アんだ、今頃になって失言だなんて、こら、卑怯だぞ。」
「でも……」
と、成田君はちょっと考えていてからいったのである。
「僕なら、そんな場合には、ひょっとしたら逃げ出さないで、やっぱり身を挺していくかもしれないんです。自分でも、そんな気がするんです。」
「そうか、すると、君はやっぱり、勇敢なるサラリーマンの資格はあるな。まア、せいぜい、しっかりやってくれ給え。期待しているからな。」
しかし、その後の成田君の勤務振りを見ていると、有能ではないが、真面目であった。当時は新入社員にアプレ的な気風が極めて旺盛であったから、成田君の真面目さが、それだけ目立った。案外、本当に勇敢なるサラリーマンであるかもしれない、と半信半疑にされるようになった。幸か不幸か、この会社へギャング

が一向に躍り込んでこなかった。社員の一部では、それを不満に思う者もないとはいえないくらいであった。だから、その腹癒せに、会社の運動会のときなど、集合場所に社旗を持って立つ、といったような好ましからぬ役を、誰に押しつけてやろうかとなると、

「それは、かの勇敢なるサラリーマンにさせようではないか。」

「ああ、それは適任である。」

と、いつでも、忽ち、衆議一決するのであった。

そんな場合に成田君が、かりに難色をしめしたところで、新入社員たる弱味がある以上、めったに許して貰えなかった。ただし、同じ新入社員が十一人もいるのだから、成田君だけがそんな貧乏クジをいつも引く必要は、毛頭ない筈のものだが、それは入社試験の際の一生一代の失言のせいだ、とあきらめねばならなかった。そして、そういう成田君のあきらめのよさは、社内の誰彼から、一応の好意を持たれるという結果になっていることが確かなら、反対に、小バカにされていることも確かであった。すくなくとも、成田君のような社員が一人ぐらい存在することは、便利この上ない次第であった。

勿論、成田君は、勇敢なるサラリーマン、といわれることが、嫌で仕方がなかったのである。平凡なサラリーマンで結構であった。しかし、一年たっても、二年たっても、誰も成田君を平凡なサラリーマンの境涯に安住させてくれなかった。成田君は本来が柔剣道で合計五段の持主であるにもかかわらず、やや内気な性分であった。だから、却って、自分が本当に勇敢なサラリーマンにならないと、何んだか虚名を博しているようできまりが悪くなってくる。いっぺんでいいから、あんまり強くないギャングが、会社へ乱入してきてくれないものか、とさえ空想するようになっていた。そのときこそは、と思うのであった。実際には、成田君はいつまでも、自分に勇敢なるサラリーマンといっては、人の嫌がる役を押しつける誰彼に対して、腹を立てていたのである。

そんな成田君に、ある日、三年先輩の米田君が、

「おい、君は勇敢なるサラリーマンだそうだが、人事課の三村桃子にタックルするだけの勇気があるかい？」

と、からかい気味にいったのである。

桃子さんは社内随一の美女であるばかりでなく、気位が高いことでも有名であった。今日まで、桃子さんに求愛して一蹴され、あるいは翻弄された男の数は、

十指に余るという評判である。その十指の中には、年甲斐もなく部長や課長もまじっていた。それから、重役街道をまっしぐらに進んでいる美男の独身社員もまじっていた。要するに、社内では誰も指を銜えながら、手をつけかねている娘なのであった。

「もし、君が三村桃子と結婚することが出来たら、それこそ絶対に英雄だよ。」

と、米田君が重ねていった。そして、更に結論を下すように、

「この会社で、あの女に求婚する勇気のある男は、目下の処、一人もいないんだよ。」

と、いったのであった。しかし、流石の成田君にも桃子さんに求婚する勇気がなかった。自信も同様であった。

すると、その翌日、会社の帰りがけに、成田君は桃子さんと会った。しかも、彼女は艶然と笑って、

「米田さんからお聞きしたんだけど、成田さんがあたしに求婚して下さるつもりって、ほんとうですの？」

呆然としている成田君に、桃子さんは、ほッほッほ、と愉しそうな笑い声を残して、さっさと先にいってしまった。まことに颯爽たる近代女性振りであった。成田君は自分がどちらかといえば、泥臭い男の部類に属していることを知っていたから、

「ああ、何んという素晴らしい娘なんだろう。しかし、要するに高嶺の花だ。」

と、大きな溜息をついた。

しかし、何んべんも溜息をついているうちに、かつて入社試験の時に、何んとでもして入社したいような猛然たる気持になったと同じに、何んとでもして、桃子さんに惚れられてみたいという決然たる心境になってきた。この瞬間に、成田君は桃子さんを深く愛してしまったようであった。そして、もしうまく桃子さんから惚れられることに成功したら、それこそ平和時代における勇敢なるサラリーマンの見本であることが実証できるし、まさに一石二鳥というべきである。成田君は無意識のうちに、かつて柔道の試合の直前にそうしたように、指の節を曲げてポキポキと音を立てさせていた。

二

その翌日から、成田君は桃子さんの動静に虎視眈々たる眼つきを向けるようになった。そして、一方の桃子さんは書類を持って総務課の部屋へ入ってくることがあると、わざと成田君の方を見て、ニヤッとしてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

くのであった。しかし、それは全然、成田君を飜弄しながら愉しんでいるとしか思えない素振りなのである。だから、米田君の宣伝によって、成田君が桃子さんに求婚するそうだ、と知っている社内の誰彼は、ひどく面白がって、

「おい、もう求婚したのかい？」

と、訊くのである。

成田君が赧くなって、いえ、まだなんです、と否定すると、

「あんまり焦らさずに、早く勇敢なるサラリーマンである証拠を見せてほしいもんだよ。」

と、催促されるのであった。

恐らく社内ではたった一人と雖も、成田君の恋が成就するであろう、とは信じていなかったであろう。それが成田君の胸にも、ヒシヒシと感じられてくる。そうなると、成田君はまるで自分が世にも偉大な恋をしているかのようにさえ思えてくるのであった。成功したら、さぞかし社内中が沸くに違いなかろう、と一種の陶酔にひたることが出来た。しかし、成田君のような男は、空想することばかりうまくて、実際行動に移るのは下手である。十日ばかり、空想ばかりに憂身をやつしていた。

そうなると、桃子さんの方が腹を立ててきた。社内の男たちを手玉に取ってきたほどの自分が、成田君風情に焦らされているようで、心外でたまらなかった。このまま、いつまでも成田君が求婚してくるという噂だけで、本当に求婚をしてこなかったら、結局、バカを見るのは自分である。早く求婚さして、適当に飜弄してやりたくて、身うちがむずむずしてくるのであった。武道の名人となると、なかなか自分の方から仕かけなくて、先ず相手に斬り込ませ、その隙を狙って一刀両断にするそうだが、柔剣道合計五段とはいえ、あの成田君に、それほどの恋の才覚があろう、とは信じられなかった。要するに、気後れしているだけに違いあるまい。そんなら、とたまりかねた桃子さんは、お昼の休憩時間に成田君に電話をかけて、今日の帰り、いっしょに帰りましょうね、と申し込んだ。勿論、成田君に否応はなかった。桃子さんはその電話を切ってから、成田君がカッと上気したような吃り声で返辞をしたことに、会心の笑みを禁じ得なかった。

桃子さんの指定した場所は、丸ビルの正面玄関先であった。桃子さんは約束の時刻より三十五分遅れていった。しかし、律儀な成田君はその間、じいっと待っていたばかりでなく、漸く現われた桃子さんの顔をち

よっと眩しげに見て、訊かれると、そこは正直に、
「三十六分、お待ちしていたですよ。」
と、返辞をした。しかし、桃子さんほどの百戦錬磨の女性になると、男に一時間ぐらい待たせることを、屁とも思わないのである。二時間のレコードを持っている。だから、
「あら、そうお。」
と、あっさりした相槌を打って、さア、行きましょう、と先に立った。成田君にとっては、今日が自分の運命を決するような千載一遇のチャンスであった。そう思うと、やっぱり胸が高鳴ってくるのである。ついでながら、成田君は二十七歳で、しかも、まだ童貞であった。
「成田さんは、いつになったら、あたしに求婚してくださるの?」
「今からします。」
「では、して頂戴。」
「僕と結婚して下さい。」
とたん、桃子さんは、ほッほッほ、と大きな声で笑った。
「あなたは、なかなか、勇敢なサラリーマンだわ。やっぱり、だわ。いきなり、そんな風にいうひと、あたし、はじめてよ。でも、あたし、気にいったわ。これで満足だわ。」
「すぐ返辞を聞かして貰えますか?」
「まア、気の早いこと。ダメよ。今日はとにかく、あなたがあたしに、はっきり求婚して下さったという事実だけにとどめておいた方が、お互のために無難よ。」
成田君は、桃子さんを、ちょっと小生意気な娘だ、と思った。しかし、決して嫌いではなかった。桃子さんのいう通り、今日のところは、自分が彼女に求婚の勇気をしめした、ということだけにとどめておいて、あとは誠意によって目的を完遂すべきであるかもしれない、と考えた。桃子さん程の女性は、そうたやすく靡く筈がない、と覚悟をすべきなのであった。
「ねえ、あたし、参考のためにお訊きしておきたいんだけど、いいでしょう?」
「何んでも訊いて下さい。」
「成田さんは入社試験のとき、もし、会社にギャングがやってきて、重役の生命が危い、となったときには、自分の身を挺して、ギャングを退治する、と仰言ったんですってね。」
成田君は苦笑した。
「正直にいって頂戴。あたし、嘘をつくひと、いちば

ん嫌いよ。」
「そんなら本当です。」
「じゃア、実際にそんなことがあったら、本当にそうなさるつもりなのね。」
「僕なら、恐らく、黙って見ていられないだろう、と思うんです。」
「立派だわ。」
「そう思ってくれますか？」
「思うわ。でも、そんなひとと結婚した奥さんを可哀そうだと思ってよ。」
「えッ？」
「だって、あとに残った奥さんがどうなるのよ。いつ何ん時、未亡人にされるかと、心配でしかたがないじゃないの。そんなの、無責任な良人というもんよ。」
こうなると、成田君も負けていられなかった。堂々と所見を述べた。
「僕は重役のために一身を犠牲にする、という精神は、妻子のためにも一身を犠牲にする精神だ、と思うんですよ。」
「じゃア、重役と妻子が、同時に危難に瀕したときには、どっちを救けるの？」
成田君は念の為に訊いた。
「それは僕があなたと結婚して、二人の間に可愛らしい子供も出来てからのことですか？」
「まア、狡い。でも、そう思ってもいいことよ。」
「そんなら、僕は、重役なんか放っといて、愛する妻子を救います。文句なしにです。」
「じゃア、あなたは結婚したら、勇敢なるサラリーマンから、勇敢なる良人に転向する方針なのね。」
「そうですとも！」
「そんな威張らなくてもいいことよ。でも、あなたに今のことを、せっかくあなたに風前の灯の生命を救って貰おうと期待している重役にいってやるだけの度胸と勇敢さがあって？」
「……」
「どうなのよう。ここが、なかなか、大切なところだわ。」
「それはあなたが、僕と結婚してくれる、とはっきり約束して下さったら、思い切っていうことにします。」
「まア、あなたって、案外、チャッカリしてるのね。あたし、ちょっとだけ、見直したわよ。」
そういって、桃子さんは、ふッふッふ、と含み笑ってから、
「でも、今日はこれだけで、おしまいよ。とにかく、

求婚の事実だけを認めてあげるわ。さいなら。」
と、いうや、さっさと成田君を残して、向うへ行ってしまった。

三

数日のうちに、成田君が本当に桃子さんに求婚した、という噂が、社内にひろがった。こうなると、成田君が、いつ、どんな風にして、桃子さんから振られるか、ということが興味の中心になってきた。振られることが当然で、その振られぶりこそ、見ものなのであった。

今までに桃子さんから振られた男の告白によると、だいたい、三種類があるようである。いきなり悶々の情を訴えて、即席で軽くあしらわれたのと、一カ月ほど交際してから、もう嫌いになったから、悪く思わないでね、と鄭重げに断念させられたのと、三カ月目ぐらいに、けしからん要求を出して、ケンもホロロに扱われたのとである。勇敢なるサラリーマンがいきなり求婚しながら、軽くあしらわれなかったということは、第一の難関をとにもかくにも通過し得たようなものであるから幸運とすべきである、との意見が強かった。しかし、それもあと一カ月のおたのしみに過ぎない筈だ、との意見の方が更に圧倒的であった。

成田君はその後、二度、桃子さんと散歩するチャンスに恵まれていた。彼はそのつど、桃子さんに、
「例のこと、重役に告白しましょうかね。」
と、催促がましくいっているのであった。
しかし、桃子さんは、
「ダメよ。目下、考慮中だから。」
と、答えるばかりであった。そして、そんなことをいう成田君の真剣な顔を眺めるのが、いかにも愉しそうで、ほッほッほ、と笑ったりした。
ある日、会社の食堂で、成田君が食事をしていると、米田君が走り込んできて、
「大変だ、大変だ、成田君。」
と、大声でいった。
「えッ？」
「今、山村重役室で暴漢があばれているらしいんだ。君、すぐいってくれ。」
「暴漢だって？」
と、成田君は思わず、立ち上った。
「さア、早く！　君は今こそ、勇敢なところを見せてくれなくちゃア。俺たちの手には負えない奴なんだ。」
食堂内は騒然となった。そして、誰も彼も、成田君

を注目した。それは、こんな時にこそ、真ッ先に成田君が駆けつけるのが当然だ、いったい、この男は何を愚図々々しているのだ、といわんばかりの眼つきばかりであった。成田君は不安な顔で、それらの人々を見返していたが、そのうちにどうにも仕方がない気分になり、

「よし。」

と、叫んで、食堂から飛び出していった。

成田君は廊下を走りながら、桃子さんの顔を、頭の中で明滅させていた。桃子さんが早く、勇敢なる良人に転向することを、重役に告白さしてくれていたら、こんなことにならずにすんだのに、と情ないくらいであった。

しかし、息せき切って駆けつけた成田君が、ノックもしないで山村重役室の扉を開くと、中には山村重役がたった一人でいて、暴漢の気配がなかった。

「何んだ?」

と、山村重役が睨みつけるようにいった。

「あの、暴漢は?」

「何、暴漢だって?」

とたんに、山村重役は椅子から飛び上って叫んだ。

「おい、暴漢はどこにいるんだ。君、頼むぞ。いいか、しっかり、よろしく頼むぞ。」

「はい。そのつもりで……」

成田君はその時になって、はじめて一杯食わされたのだ、と悟った。急に狼狽して、

「あの、申しわけありません。どうも間違いらしいんです。はい、どうも。」

山村重役は急に威厳をとり戻して、

「こら、あんまり、人騒がせな真似をするんでない。」

と、叱りつけた。

成田君はペコペコと頭を下げながら、重役室を出た。嘘をついた米田君を殴りつけてやりたいくらい腹が立っていた。成田君が食堂に戻ると、万雷の拍手で迎えられた。米田君はニヤニヤしている。成田君はつかつかと米田君の前にいって、睨みつけながら、

「おい。」

と、呶鳴りつけた。

「僕は山村重役に人騒がせな真似をするな、と叱られてきたんだぞ。」

そんな成田君には、柔剣道合計五段の貫禄が充分にあった。

「何、山村重役が部屋にいたのか? いない筈だったんだがなア。しかし、まア、いいじゃないか。君が勇敢

なるサラリーマンであることが証明されたんだから。」
と、米田君はちょっとうしろへ退った。それから周囲の同感を求めるように見まわした。成田君はいよいよ腹が立ってきた。そのときまで、じいっと成行を見つめていた桃子さんが、二人の間に割って入り、
「米田さんがいけなくってよ。」
と、叱りつけた。
米田君は面目ない顔になった。何故なら、米田君も亦、桃子さんに惚れていたのである。そして彼がこんな悪ふざけをしたのは、成田君と桃子さんの間の進展ぶりが、案に相違して良好らしいので、いっぺん思い切って成田君を道化者にしたかったのであった。
あとで、成田君も桃子さんから叱られた。
「あんなに勇敢なる良人になる、といっていた癖に、成田さんて、あたし、まだまだ信用ならないわ。そんなサラリーマン根性なんて、今どき流行らないのよ。」

四

会社の運動会の日となった。
重役から給仕にいたるまで、三台の貸切バスに乗って箱根に向かった。一年中でいちばん嬉しいサラリーマンの解放日であった。重役と雖も、この日はめったに叱ったりしないし、妻帯者は久しぶりで外泊できる。独身の男女は、この日から恋愛関係に入ることが多いのである。
時は新緑の候であった。
一行は仙石原で一泊し、翌日は箱根に向けて出発した。
桃子さんの美しさは際立っていた。それは成田君にとって、溜息が出るくらいであった。そして、成田君の癖で、溜息を何んべんもしているうちに、いよいよ、桃子さんと結婚したくなってくる。それはどうにも、我慢できないほど強烈無比な思慕の情であった。
成田君は幸いにして、桃子さんと並んで、バスに乗ることが出来た。
「僕はあなたに求婚してから、もう四十五日になりますよ。」
「あら、そうかしら。」
「もうそろそろ、ご返辞を下さい。」
「どんな返辞でもいいのなら。」
「ガッカリする返辞ならいりません。」
「じゃア、返辞をしないことにするわ。」
「それだけで、僕はもうガッカリしそうだ。」
「ふッふッふッ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong